

## 日本映画のサウンド移行期におけるラジオとの関わり

### 一映画人のラジオ出演をめぐる

仁井田千絵

日本映画史において、昭和初期にみられた映画のトーキー化は、技術・資本の不足や弁士の没落といった苦難の歴史として語られてきた。本稿では、一般的に欧米よりも長くかかったとされる日本のサイレントからトーキーへの移行の実態を、同時期のサウンド・メディアであるラジオとの関わりから見直している。弁士が出演する「映画物語」、映画俳優が出演する「放送映画劇」という二つのラジオ番組に着目し、その内容を当時の新聞のラジオ欄と日本放送協会が発行する業界紙の資料から考察することにより、個々の映画館で提供されていた多様なサウンドがトーキーによって全国的に統一されていく過程において、公共放送としてのラジオが大衆的な映画に公的な側面を与え、トーキーが実現する以前にそれを模擬体験するシミュレーションの場を与えていたことを明らかにした。

## Japanese Cinema and the Radio During the Transition to Sound: Radio Appearances of *Benshi* and Film Actors

Chie NIITA

This paper examines the relationship between Japanese cinema and the radio in the first decade of the Showa period, which coincides with the transitional period from silent films to talkies and the early years of broadcasting. Japanese radio broadcasting as a public enterprise under the strong supervision of the government provided an official and legitimate aspect to the film-radio relationship. Also, in the midst of the technical difficulties of the early talkies, radio sound complemented the lack of synchronized film sound by providing new alternatives or simulations of cinematic sound.